

長野県立こども病院 外来医師担当表

平成22年4月1日現在

長野県立こども病院だより第15号 発行日:2010年3月25日 発行者:宮坂 勝之
〒399-8288 長野県安曇野市豊科3100 TEL 0263-73-6700 FAX 0263-73-5432



長野県立
こども病院だより

2010年3月25日発行 No.15



長野県立こども病院理念

「こどもは社会に潤いを、未来に希望を与える宝物です」
長野県立こども病院は、周産期・小児の専門医療を、
全人的な総合医療として提供し、未来あるこどもたちの
健やかな育成を目指します。



日本医療機能評価機構
当院は日本医療評価
機構の認定病院です。

外来名	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
整形外科	藤岡文夫(AM)	(手術日)	松原光宏(AM) 藤岡文夫(AM) (PMは職員) 加藤博之(AM)		藤岡文夫 松原光宏
小児外科	好沢 克(AM) 高見澤 滋(PM)	高見澤 滋(AM) 高見澤 滋(AM) (15:30~)		町田水穂(AM) 好沢 克(PM)	町田水穂(AM)
眼科	非常勤 ^{※2}			非常勤(第1木AM)	非常勤(AM)
総合診療部	川合 博(AM) 平林耕一(PM)	石井栄三郎(AM) 石井QOL(PM)	川合 博(AM) 高山和生(PM)	竹内浩一	石井栄三郎(AM)
内分泌		竹内浩一			
血液・免疫	石井栄三郎	南雲治夫	石井栄三郎	平林耕一	南雲治夫(AM)
循環器科	原田順和 坂本貴彦(AM)	安河内 聡 瀧間浄宏	坂本貴彦(AM)	安河内 聡 松井彦郎	瀧間浄宏 松井彦郎
脳神経外科	重田裕明 宮入洋祐(PM)	重田裕明		重田裕明 宮入洋祐(PM)	
泌尿器科		西澤秀治 ^{※3} 信大医師(AM)			
小児外科					高見澤 滋 (青森・ 中心野原栄外 ^{※4})
総合診療部 新生児フォローアップ	中村友彦(AM)	小久保雅代	廣間武彦	廣間武彦(AM) 三代澤幸秀(PM)	小久保雅代
形成外科	野口昌彦 藤田研也(非)PM 第1月曜日のみ	近藤昭二(PM)	野口昌彦 紫田佳奈(PM)	野口昌彦(AM) (PM)	野口昌彦(PM) 池上みのり(PM)
麻酔・集中治療科	大畑 淳(AM)				
総合診療部 予防接種外来(第2・4)		川合 博(PM)			
皮膚科			芦田敦子(非)AM		
神経科	平林伸一	平林伸一 平野 悟	笛木 昇 平林伸一(PM)	平野 悟(PM)	平林伸一 平野 悟
精神科 こころの診療科				原田 謙(非)PM ^{※5}	
遺伝科	古庄知己(PM)				川目 裕 ^{※6}
耳鼻いんこう科		工 藤(非) (PM2:00~5:00)			
循環器科 胎児心臓外来		松井彦郎(PM)		瀧間浄宏(PM)	安河内 聡(AM)
産科	高木紀美代 菊池昭彦(PM)	高木紀美代 堀越嗣博	菊池昭彦 高木紀美代	堀越嗣博 菊池昭彦(PM)	菊池昭彦 高木紀美代
リハビリ テーション科	笛木 昇 原田由紀子(非)	河野千夏(非)PM 笛木 昇(PM) (摂食嚥下外来)	平林伸一(AM)	笛木 昇 平野 悟(AM) 原田由紀子(非)PM	笛木 昇(AM職員) 河野千夏(PM)

※1 整形外科の加藤医師は隔月第3水曜日のみです。
※2 4/5・26、5/17・31、6/7・21の診察日となります。
※3 第1・3・5週 西澤医師、第2・4週 信大医師の診察日となります。なお、西澤医師の午後は皮膚・排泄ケア外来となります。
※4 第2・4週は午前・午後、第1・3・5週は午後からの診察となります。
※5 精神科(こころの診療科)外来の初診を受けるには、予め総合診療外来または神経科外来の受診が必要となります。
※6 4/2・16、5/7・21、6/4・18の午前11時からの診察となります。
★診察時間:午前9時~午後4時 休診日:土・日曜日、祝祭日、年末年始
★受診には、原則として予約が必要です。また、初診時には保険医療機関からの紹介状が必要です。
予約受付時間:8時30分~17時15分 月曜日~金曜日(土・日曜日、祝祭日、年末年始を除く)

予約専用電話
0263-73-5300

ご挨拶

院長 宮坂勝之



季節外れの雨もありましたが、今年には時折雪も降り寒さもそこそこであった冬でした。それでも地球温暖化のせいでしょうか、安曇野のこども病院周辺でマイナス10度を下回る場面がないまま、もうすぐ早春賦の時期になります。そしてこの4月1日で、当院は地方独立行政法人に移行再出発となりますので、本号は、長野県立こども病院としては最後の病院だよりになります。
大変お世話になりましたが、私の院長としての任期はこの3月一杯です。低成長時代の象徴ともいえる、年間出生数減少が著しい少子高齢社会の長野県で、こどもの健康を守り続けるために、県立こども病院は何ができるのかを考えたこの4年間でした。
病院が開設された当時の高度成長時代の名残の中で、いわば前だけを向いて走り続けてきた仲間には難しい意識改革を求めました。狭い範囲の高度専門医療、小児内科医療を提供するだけでは立ちいかず、全人的な小児総合医療を提供すべきこと、注がれてきた巨額の繰入金にも厳しい説明責任が求められることなど、患者を前にした現場の医療者には今まで余りつきつけられたことのない課題でした。一方私は地方のこども病院の院長の立場でしかできない、こうした意識改革、経営改善努力を中央で発信し、その上

でも及ばない小児医療の報酬体系改善を訴え続けました。着任以来4年弱でしたが、「何時でも誰もが訪れることができる」、地域に育てられる病院を目指し、より多くの患者に利用して貰いたいとの改革への理解は向上し、診療報酬面でも大きな成果があげられました。こうした思いを支えて下さった院内・外の皆様のご支援に心より感謝いたします。
重症患者を必ず受け入る小児ICUがあり、24時間体制の救急医療を行い、そして在宅医療移行を積極的にすすめるようとする、当院のようなこども病院を診療報酬面でも補助金の面でも応援する姿勢が明確に打ち出されています。これは、新生児乳児死亡率が大幅に改善した今でも、日本の4才以下の小児の死亡率が先進国の中で突出して悪く、その背景に小児救急医療、小児集中治療の未整備があることが認識されたためです。それにも増して重要なことは、今のままの敷居の高い医療は、急速に進行する少子高齢社会がもたらす病院利用患者数の急速な減少に対応できないことです。当院が独法化後も一層県民に貢献し、発展していくためには、小児救急患者の受け入れ体制をよりしっかり築きあげる必要があります。
昨年2月に、全国に

Contents

ご挨拶..... 1
小児救急の現状について..... 2
在宅支援について..... 3
コーラル文庫・さんごの図書室..... 4
医療被ばく低減施設に認定..... 5
独立行政法人化について..... 5
外来医師担当表..... 6

医療被ばく低減施設に認定されました

医療技術部長兼放射線技術科長 中沢利隆

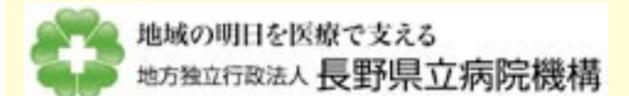
医療施設で使用されている放射線機器は、検査や治療に使用するというメリットの反面、使い方を誤ると人体に有害なものとなり、繰り返す検査や治療は被ばく線量の増加というデメリットを生じさせます。

医療被ばくについて診療放射線技師が専門職として責任を持つのが当然ですが、医療組織としての取り組みがなければ「医療被ばく低減」の具体的な成果は期待できません。今回、当院放射線技術科では（社）日本放射線技師会がおこなう「医療被ばく低減施設」の認定を受けました。この事業は、国民（患者）に「医療被ばく低減」という、新たな病院選択肢を与えることや医療施設に医療被ばく低減のきっかけを与えることを主な目的としています。昨年10月の「自己評価票書類」による一次審査を合格、同年12月には、現地訪問2次審査を受けました。

その結果として、国際放射線防護委員会勧告である放射線利用の三原則“放射線検査行為の正当化”、“放射線防護の最適化”、“個人線量の限度”について、

医療被ばく低減のための適正な体制の整備、運営が能動的に行なわれていることが評価され、平成22年3月1日付けで「医療被ばく低減施設第18号」に認定されました。全国で18番目、長野県第1号、全国のこども病院としては初の認定となります。

常日頃から患者さんへの被ばく線量を総合的に低下させようとの日ごろの研鑽が実を結んだものと思います。



長野県立こども病院は 独立行政法人に移行します

「こども病院」と「須坂・駒ヶ根・阿南・木曾各県立病院及び介護老人保健施設（阿南・木曾）」は、4月1日より今まで県が運営してきた県立病院としての形態から、県が100%出資して設立する「地方独立行政法人長野県立病院機構」に移行します。法人化によって運営が県から法人へ移行することになり、現在の病院を取り巻く経営や組織・人的な課題にスピーディーに対応することができるようになります。

県立こども病院は引き続き、未来ある子どもたちの健やかな育成を目指してまいります。

編集後記

平成18年5月の就任以来3年11ヶ月、宮坂勝之院長がこの3月31日をもって御退職されます。長野県の小児医療、こども病院のすすむべき方向について、国内外での幅広い経験とご見識に基づいた多くの提言と実践をいただいた4年間でした。少子高齢社会が一段と進行する一方で小児医療を取り巻く環境は救急医療、周産期医療をはじめとしますますます複雑困難な対応が想定されます。寅年の2010年、「虎は千里の藪に住む」「虎は千里を渉る」とも、引き続き当院へのご指導ご支援をお願いするとともに、先生のますますのご健勝ご活躍をお祈りします。紙面がお手元に届くころは、独立行政法人として職員一同気持ちも新たに職務に励んでいることと思います。今後ともより一層のご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

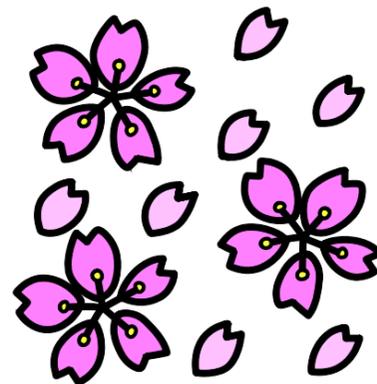
先駆けて開棟した在宅移行支援病棟は、1年経ち当初の期待どおりの方向で動き出しております。全国的に注目されていることは誇りですが、勿論まだまだ課題はあり、地域とのネットワーク、インフラストラクチャ作りなど、これからの基盤作りがまさにはじまったばかりです。

院内では、「医療の安全」を軸にした電子カルテ化の作業が今急ピッチで進行中です。時間的な制約が多い中で作業で、多くの職員に負担をかけており、また時代の流れに戸惑う職員も確かに存在しますが、こども病院の将来のために避けて通れない道です。医療情報の電子化は、電子化そのものよりも、その過程で医療情報共有という意識改革と日常業務の大幅な改善を行うことに大きな意義があるものです。その効果は既にではじめています。

先般あった当院医師のPC盗難事件でも、冷静な対応がとれ、患者・家族へのご迷惑は最小に留められました。また長年懸案であった患者の安全確保のために、麻酔薬の使用に麻酔科医が必ず関与する方針が決められたのもそうした意識改革の例の一つです。電子カルテ化を機会に、当院ではこれまで希薄であった診療科間の情報共有の促進を足がかりに、チーム医療が定着し、医療の質の

更なる向上にもつなげられると思います。そうなれば、当院は多くの医師や看護師にとって魅力のある職場となります。そのためにも、あらゆる小児の急病を受け入れる小児救急医療の具体化に当院の将来がかかっています。

毎日落ちていた音色を奏でる時計台のカリヨン、新設なったコーラルシアターでの谷村新司さん親子のコンサート、季節毎に変えられるいわさきちひろさんのピエゾグラフ、サイトウキネンのコンサート、四季折々の生け花など、こども病院には多くのボランティアの方々が関与してくださり、毎日こどもたちに明るいエネルギーを注いでくださっています。そうした皆様に感謝させていただくとともに、これからも、地域に育てられるこども病院であることを願っております。



小児救急の現状について

麻酔・集中治療部長 大畑 淳

平成18年5月宮坂院長が着任されて最初に主張されたのが、こども病院が「何時でも誰でも受け入れる」体質へと変換すること、すなわち小児救急医療への積極的な取り組みでした。この4年間で院内および院外の小児救急医療への受け止め方は大きく変わり、診療体制も大きく手直しされてきています。

まだとても十分ではありませんが、それまで院外一般の方々や医療関係者さえもが当こども病院に対して根強く抱いていた「紹介状がなければみない」、「簡単な病気はみない」、といった敷居の高さの風評は払拭されつつあり、病気の子どもをもつ多くの家族に気軽に利用される雰囲気を作られてきています。

確かにそれまでの当院は、一般市中病院と全く変わらない各診療科が日替わりで担当する救急当直体制であり、「専門が違うから」と急患をお断りすることも希ではありませんでした。院内の多くの専門医が十分に有効に活用されていませんでした。しかし今では総合診療部が全ての救急患者を受け入れる窓口として機能し、それに24時間体制のPICU(小児ICU)やNICU(新生児ICU)

が協力する体制がとられています。実際に診療にあたる医師、研修医の多くが、未だ総合診療体制、小児集中治療を経験してきていない日本の小児医療教育の限界もまだあります。また今の取り扱い患者数では経営的にも院内の全てのシステムを24時間体制にするだけの体力がなく、更なる改革が必要です。

幸い平成22年度からは、当院のような、PICUを有する小児医療専門病院での小児救急の充実が国策として謳われており、独法化後の新年度には、当院も小児重症患者を取り扱う小児救急救命センターとしての役割が担える方向での体制整備が急ピッチでなされることが期待されます。

小児救急医療が成人と異なる点は、多くの軽症患者の中に一定の頻度で入り込む重症患者の存在であり、PICUが機能しない地域では、小児科医が小児救急患者を安心して受け入れられないことです。長野県にどんな患者も厭わず受け入れるPICUを有するこども病院があることで、患者家



族は勿論、診療所や市中病院が安心して小児医療に取り組めますし、そこで育った小児科医が県内に拡がることで小児総合診療が定着することにつながりますが、良い兆しがみえはじめています。

今年度猛威を振るった新型インフルエンザの流行では、そうしたシステムが良く機能しました。予定された入院患者を止めてでも、紹介された重症小児インフルエンザ患者は必ず PICU に受け入れることを決め、必要な場合には往診搬送も含め積極的に対応しました。当院最初の PICU 入院は、8 月 30 日入院の 8 才の男児でしたが、その後この 3 月末までに 24 名の小児患者が、ドクターカーあるいはドクターヘリによる搬送入院となりました。この中には、HFO (High Frequency Oscillation 高

頻度振動換気法) を必要とした超重症例 2 名を含む 8 名の人工呼吸管理症例が含まれています。幸い全ての小児患者を救命することができました。多くの中核病院の小児科医の負担軽減となったと感謝されました。24 時間県内全ての病院の小児救急の輪番病院の役割を持つことが理解されつつあります。当院小児 ICU は 8 床ですが年間入院数は 400 例を越えました。

インフルエンザ流行期には、近隣の保育所や小さな子どもを持つ親、そして地元開業医からも、当院が今以上に幅広く小児救急医療に関与して欲しいとの声が寄せられました。当院の救急医療体制も、こうした社会の要請に積極的に合わせて進化させてゆくこととなります。

在宅支援について — 第2病棟を開設し、1年を振り返って —

こども病院 患者・地域支援室 看護師 福島華子

「長期にわたる医療的ケアを必要とする小児を在宅医療にスムーズに移行し児により良い QOL を提供する。」という理念を掲げ、昨年 2 月に在宅医療支援病棟として第 2 病棟が開設されました。開設の背景として、症状が安定しているが半年以上の長期にわたる入院患者さんの増加により救急の重症患者さんの受入が難しくなり、長野県の高度小児医療と総合周産期医療の拠点施設としての機能を維持することが困難となることを防ぐ。また、長期の入院患者さんが本来望む在宅療養への移行がより順当に行われることの両面の必要性から院長の強いリーダーシップのもと整備されました。

開設にあたり、在宅移行から移行後の支援も含め、医師や看護師、医療ソーシャルワーカーなどの専門チームを発足、病棟のあり方について話し合いを持ちました。この病棟の目的は長期入院患者さんの在宅移行支援、在宅移行後の患者さん・ご家族の支援をめざしています。開設後本年 1 月までに 36 名の患者さんが入院し、内長期入院患者さんは 13 名、その内 10 名が在宅もしくは



他施設へ移行しました。短期の評価、検査入院利用者は 23 名でした。

この病棟には 2 つの大きな特徴があります。一つは、ご家族の協力を得ながらの兄弟姉妹も病棟に入ることができます。このことにより家族の面会が増え、兄弟

くうちやんの餅つき

姉妹の入院中の児に対する関心が高まりました。また、保育士を中心とした病棟内の様々なイベントに兄弟も参加し、家族全員が一緒に過ごす機会となっています。患者さんも私達に見せてくれる表情とは違い、お兄ちゃんやお姉ちゃんの顔になります。もう一つの特徴は病棟内で家での生活を体験することができるよう、家族だけで過ごす部屋を設置しました。病状が安定しているとはいえ、病院からいきなり家へ帰るには勇気がいるものです。そこで、様々なスタッフが関わり、ご家族といっしょに家での生活をイメージし準備をしていきます。その際、経済的支援、社会制度の活用、家族以外の医療的ケアを担うマンパワーの紹介など地域とのパイプ役を患者・地域支援室で担っています。家に帰ることは喜びでもあります。しかし、その半面不安もあり、少しでも不安の軽減につながる情報提供や支援をしていきたいと考えています。

もう一つの目標である在宅移行後の患者さん、ご家族を支援する上では、移行後も患者さん、ご家族の体調や支援の様子、不具合を確認調整し、必要ならば入院し支援をすることが可能になりました。しかし、まだまだ不十分な点もあり地域病院と連携し、移行後のバックアップの体制を整えていく必要があると考えています。

在宅支援といっても奥は深く、毎日悪戦苦闘です。しかし、一步一步ゆっくり皆さんと歩んでいけたらと思います。



広ちゃんの七五三

信州青年の船からの贈り物

「コーラル文庫・さんごのとしょじつ」が完成しました

信州青年洋上セミナーに参加された1万人以上の県民の皆さんからの拠出金を基金として設立された「コーラル・ファンド運営委員会（青年育成国際交流基金）」が解散されることになり、昨年8月にその基金が長野県に寄付されました。

ファンドのお申し出により、こども病院のエントランスホールの一角に「コーラル文庫・さんごのとしょじつ」がこのほど完成しました。本棚や絵本棚、クマやキリンをモチーフとしたベンチを置き、入院中や外来を受診される患者さんやご家族をはじめ、一般の方も自由に本を読むことができ、更にその頭上には、150インチの大型スクリーンを設置し、コーラルシアターとして病院祭やコンサートなどイベントの際の有効利用ができるものと職員一同改めて感謝するとともに、期待に胸膨らませています。

今回の寄付金をもとに子供向けの本や絵本、視聴覚システムとメディアの充実も行いました。また、昨今の国際化に対応するために、英語やポルトガル語、中国語など多国籍に対応した本も購入しています。思春期の子どもや親御さんにも利用されるこれらの本やDVDなどのメディアには、コーラル文庫（さんごのとしょじつ）という海に因んだ命名がされており、それぞれにシールが貼付されてい

ます。すでに患者図書館として設置されているしろくま図書館ともども癒しの広場として大いに利用していただき、コーラルプリンセス号が掲げた「青少年の健全育成」、「国際交流」の2つのキーワードを通して、未来ある子ども達の健やかな成長のため、未来へ希望をつなぐ棧橋となるよう活用してまいります。

昨年12月25日（金曜日）には、この新設されたスペースを使い、入院中の患者・ご家族の皆さんにうれしいクリスマスプレゼントがありました。谷村新司さんの『ココロの学校 ハミング♪ライブ ～歌の贈りもの～』ライブです。当日は娘さんの詩織さんとICU病棟などを訪問、入院中の子どもたちに元気をいただきました。夕方からクリスマススムードたっぷりにお二人に歌を披露していただき、外は寒いけれど会場は観客の皆さんの熱気に溢れていました。さらに、3月24日には、コーラル・ファンド運営委員会として、今回の寄付に対してご尽力をいただいた皆様に感謝の気持ちをお伝えするために、代表の方々をお迎えし、「コーラル文庫・さんごのとしょじつ」のオープニングセレモニーが行なわれました。



ココロの学校
ハミング♪ライブ
～歌の贈りもの～
平成21年12月25日



コーラル文庫・コーラルシアター
さんごのとしょじつオープニングセレモニー
平成22年3月24日

ご寄付ありがとうございます

“患者さま・病院に”と多くの方々からいただきました。感謝をこめてご芳名を掲載させていただきます。

齋藤せつ子様

熊谷愛子様

JA あづみ豊科支所様

大町ほいく園児・父母の会様

生命保険ファイナンシャルアドバイザー協会様

学校図書館によい本いっぱい文庫運動推進連盟様

豊科サンタ様

大町ほいく園長 関 英晴様

(2009年10月より)